

日本の 2013 年 4～6 月期貿易動向

円安による価格競争力の回復により、4～6月期の輸出は増加。但し、海外需要の低迷が足を引っ張っている。輸入は、円高による預入抑制を勘案しても、国内需要の堅調に比して弱めの推移。今後は、消費税率引き上げ前の駆け込み需要により増勢が強まると予想。貿易赤字は4～6月期に大きく縮小。4～6月期の縮小は、輸入の弱さに支えられており出来過ぎだが、趨勢でも徐々に縮小する見込み。

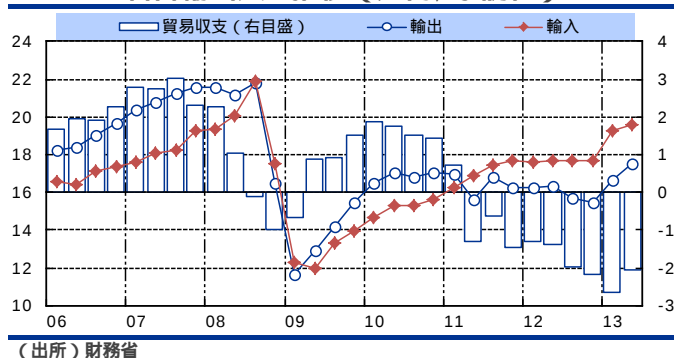
貿易収支は概ねボトムに到達

2013年4～6月期の貿易収支は▲2兆653億円となり、前年同期の▲1兆3,703億円から赤字幅が大きく拡大した。但し、季節調整値で見ると、昨年10～12月期2兆1,944億円、今年1～3月期2兆6,411億円、4～6月期2兆613億円と、赤字幅の拡大が止まりつつある。後述するように、2013年1～3月期から4～6月期にかけての赤字の大幅縮小は、輸入の一時的な低迷に支えられている部分が大きく出来過ぎと考えられるが、円安が輸出数量を押し上げる効果などを踏まえると、貿易赤字は概ねボトムに達した可能性が高い。今後は消費税率引き上げ前の駆け込み需要が輸入を押し上げるため、赤字縮小が一気に進むとは見込みにくい。日本の貿易赤字は当面のボトムには到達し、今後は徐々に縮小へ向かう可能性が高いと考えられる。

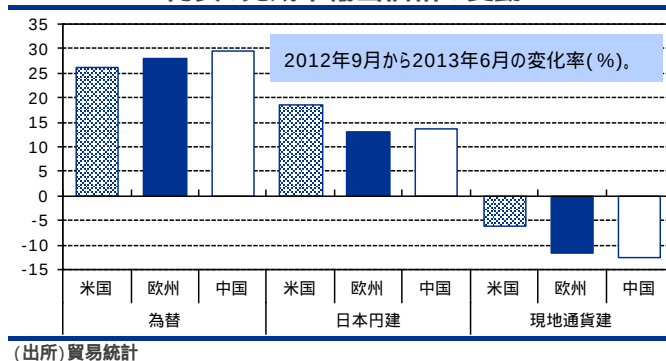
円高修正が輸出を押し上げ

4～6月期について、まず輸出の動向を見ると、円高修正の継続に支えられ、輸出額（名目輸出）は前期比5.0%（1～3月期7.7%）と2四半期連続で拡大した。内訳を見ると、輸出デフレーター¹の伸びは2.4%と1～3月期の9.2%から鈍っており、為替相場（名目実効レート）の減価ペース（1～3月期▲12.4%、4～6月期▲6.1%）も大きく下回っている。こうした為替変動対比での輸出デフレターの低い伸びは、企業が円安メリットを原資に価格を引き下げた影響と考えられる。例えば、完成車輸出価格の動向を見ると、現地通貨建て価格が引き下げられていることが確認できる。こうした価格引き下げが価格競争力の向上となり、輸出数量の増加に結び付く。

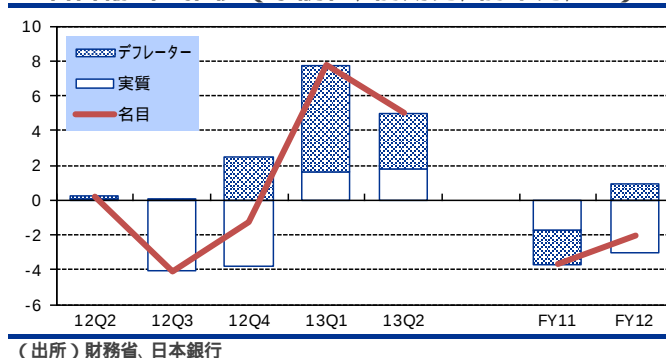
名目輸出入の推移（兆円、季調値）



円安と完成車輸出価格の変動



名目輸出の推移（季調値、前期比、前年比、%）



¹ 当社は、輸出額を概況品毎に実質化し、実質輸出を試算している。本稿で用いている輸出入デフレーターは、その実質輸出と名目輸出から計算されるインプリシット・デフレーターである。

最終需要の戻りの鈍さが輸出数量を圧迫

但し、輸出数量に相当する実質輸出²の動向を見ると、1～3月期前期比1.6%が4～6月期は1.8%となり、増加基調こそ確認できるが、伸びは高まっていない。これは欧州や中国における景気回復の遅れにより、海外最終需要の戻りが鈍いためと考えられる。当社の分析によると円安が輸出数量に及ぼす効果は、7ヶ月程度の波及ラグを伴う。2013年5月まで一本調子で円安が進んでいた点を勘案すれば、円安の輸出数量押し上げ効果は2013年に関しては四半期が進むほどに強まっていくと考えられる。しかし、海外最終需要の動向が足を引っ張り、輸出の増勢を鈍らせる可能性には留意が必要である。

輸入は低調に推移

輸入の動向を見ると、輸入額（名目輸入）は1～3月期前期比9.3%が4～6月期は1.3%へ減速した。資源価格下落などにより輸入デフレーター³の伸びが2.5%（1～3月期12.4%）と小幅にとどまった要因もあるが、価格変動を除いた実質輸入で見ても0.3%（1～3月期1.9%）とほぼ横ばいにとどまる。

輸入の内訳では、化学製品や鉱物性燃料の落ち込みが目立った。後述するように、他への燃料再シフトが見込みにくい下で、4～6月期に鉱物性燃料の輸入は需要対比で弱めだったと評価できる。また、他の生産財輸入の低調推移も国内需要の堅調推移と不釣り合いである。そのため、今後予想される消費税率引き上げを控えての駆け込み需要を勘案すると、7～9月期以降に輸入は増勢を再び強める可能性が高い。

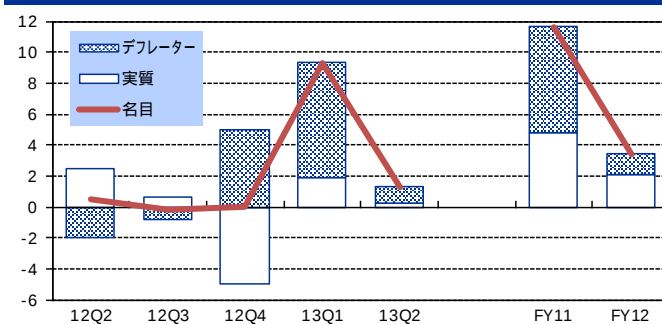
以下では、当社試算の実質輸出入³に基づき、輸出について仕向け地別に、輸入については品目別に動向を振り返る。

1. 輸出

(1) 対世界：米国向けがけん引

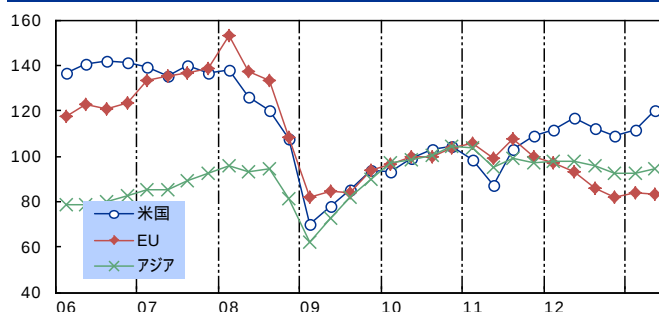
4～6月期の実質輸出は、既に述べたように前期比1.8%（4～6月期1.6%）と2四半期連続で増加した。仕向け地別には、底堅い景気回復を見せた米国向けが大幅に増加し、アジア向けも4四半期ぶりの拡大へ転じている。ただ、アジア向けの拡大は日中間のトラブルで落ち込んでいた中国向け輸出の正常化によるところが大きく、それを除けば持ち直しの動きはそれほど強くない。景気低迷が長期化しているEU向けは下げ止まったとは考えられるが、未だ底這いにとどまる。

名目輸入の推移（季調値、前期比、前年比、%）



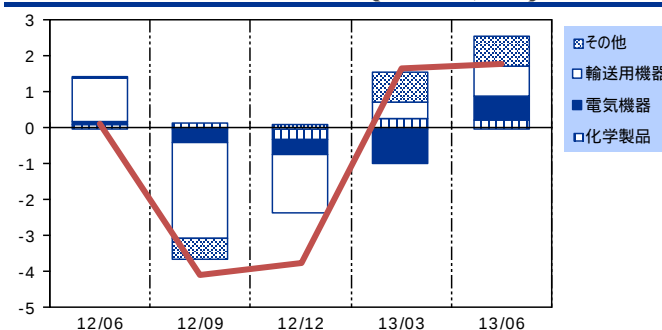
（出所）財務省、日本銀行

地域別実質輸出の推移（2010年=100）



（出所）財務省、日本銀行

実質輸出：対世界（前期比、%）



（出所）財務省、日本銀行

² 前掲の注釈1を参照。

³ 日本銀行の試算方法を参考に、地域別・主要品目別に試算している。

品目別に見ると、円安を受けて多くのカテゴリーで輸出が増加している。中でも、特に押し上げ寄与が大きいのは、米国向けを中心に輸出が増加している自動車主力の輸送用機器、IT分野の回復を受けた電気機器である。また、化学製品や鉄鋼など素材品目の回復も目立った。

(2)対米国:増勢加速

米国向け輸出は4～6月期に前期比7.8%(1～3月期2.2%)と2四半期連続で増加、かつ増勢が加速した。

米国自動車市場の回復と、日本車の価格競争力向上を受けて自動車輸出が拡大している影響が大きい。自動車輸出は4～6月期に11.8%(1～3月期2.0%)と大幅に増加し、米国向け輸出全体を4.3%Ptも押し上げている。

輸出増加の背景にある米国自動車の動向を確認すると、販売台数全体は4～6月期に年率1,540万台(1～3月期1,531万台)に達し、金融危機前の2007年以来の高水準を記録した。内訳では特に日本車が好調であり、2013年前半の販売台数は2012年後半から8%も増加している(市場全体は4%増加)。日本車の販売内訳を見ると、現地生産車が主力である構造に変わりはなく、輸入車の利益率改善を受けて4月以降は輸入車のシェアも上昇しつつある。

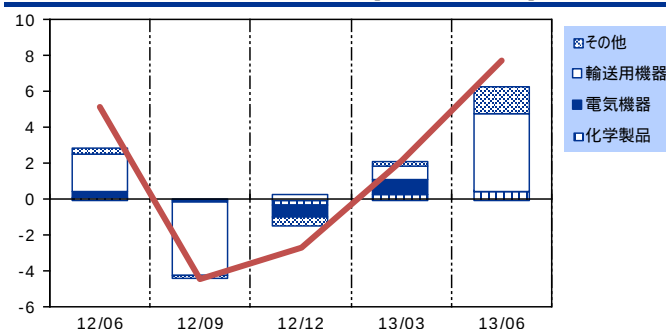
(3)対EU:底這い

EU向け輸出は2012年10～12月期まで5四半期連続で減少した後、1～3月期に前期比2.1%と増加に転じた。しかし、4～6月期は▲0.4%と再び減少している。概ね下げ止まったとは考えられるが、ユーロ圏経済が低調推移を続ける下で持ち直しへは向かわず、底這い状態が続いている。なお、4～6月期のユーロ圏経済はプラス成長へ転じた可能性が高いが、当社は底入れとの判断は時期尚早と考えている。先行きも、EU向け輸出に多くを期待はできないだろう。

(4)対アジア:持ち直し

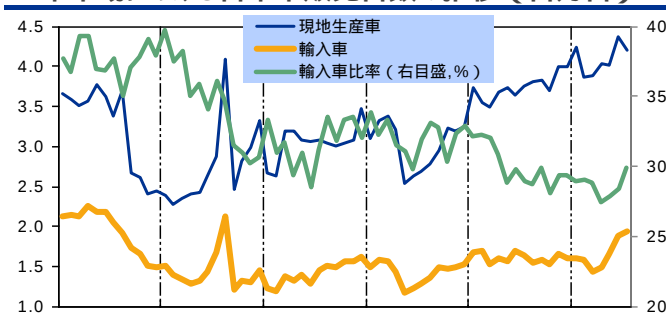
4～6月期のアジア向け輸出は前期比2.1%(1～3月期▲0.0%)と4四半期ぶりに増加した。中国向けが4～6月期に3.8%(1～3月期2.8%)と持ち直した影響が大きい。但し、中国向けの増加は、昨年後半に日中間のトラブルにより落ち込んだ反動による部分が大きく、過大評価は禁物である。

実質輸出：対米国（前期比、%）



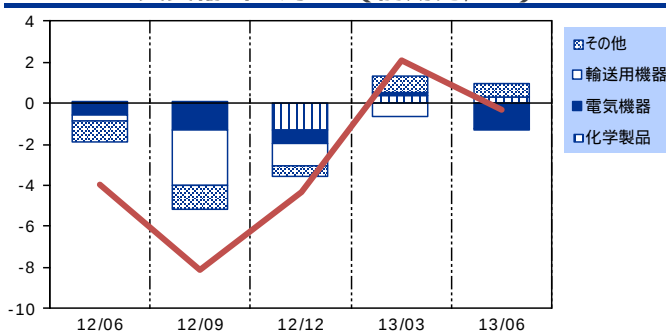
(出所)財務省、日本銀行

米市場における日本車販売台数の推移（百万台）



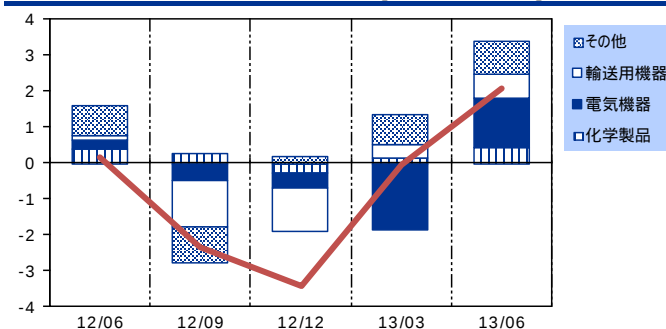
(出所) BEA, Bloomberg

実質輸出：対EU（前期比、%）



(出所)財務省、日本銀行

実質輸出：対アジア（前期比、%）



(出所)財務省、日本銀行

中国向けは回復も未だ水準は低い

中国向けの4～6月期輸出は前期比3.8%と増加したが、約半分は自動車輸出の回復によるものである。自動車が主力の輸送用機器輸出が前期比25.1%と大幅に増加し、中国向け全体を2.0%Ptも押し上げている。他では食料品輸出が30.6%（1～3月期58.6%）と2四半期連続で大幅に増加したのが目立つ。4～6月期に食料品輸出は東日本大震災前の水準を概ね回復した。但し、中国向け輸出全体の4～6月期の水準は、日中間のトラブル発生前の1年前の水準を未だ7%程度下回っており、順調に回復しているとは言いがたい。

NIEs向けはITセクターを中心に回復

NIEs向けは4～6月期に前期比3.1%（1～3月期1.5%）と2四半期連続で増加した。世界的なITセクターの持ち直しを受けて、電気機器輸出が8.4%（1～3月期▲7.5%）と増加した影響が大きい。また、ITセクター向けに半導体製造装置などの輸出も伸びている。半導体製造装置等が含まれるはん用・生産用・業務用機器の輸出は4～6月期に▲2.2%と減少したが、1～3月期に6.0%と大幅に増加しており、趨勢としては持ち直しへ向かっている。

ASEAN向けの持ち直しは鈍い

4～6月期にASEAN向けは前期比1.4%（1～3月期▲1.1%）と辛うじて4四半期ぶりに増加した。2012年度に前年比7.9%と大幅に増加しているため、輸出水準こそ高いものの、直近数四半期は明らかに不冴えである。品目別には、従来、ASEAN向け輸出の牽引役であった機械関連の増勢が鈍っている影響が大きい。

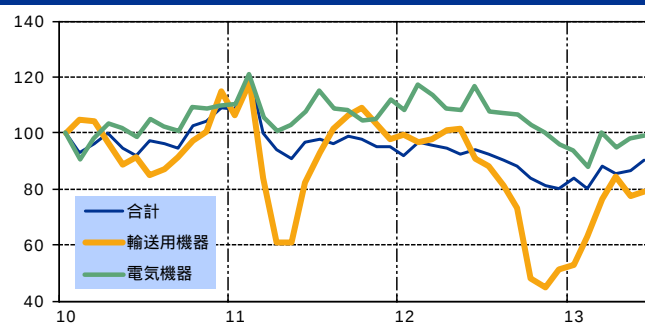
これまで高成長を謳歌してきたASEAN各国において景気減速が目立ち始めている点も、輸出の戻りが鈍い一因と考えられる。

2. 輸入

輸入は過去1年低調

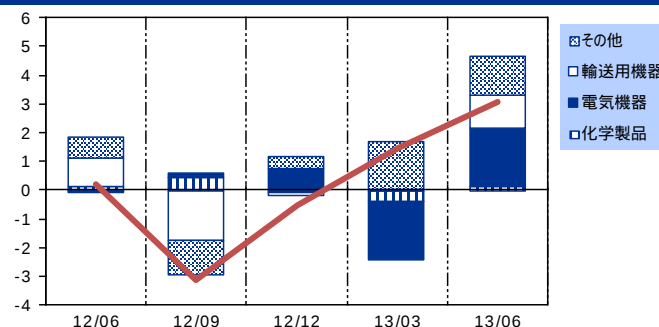
輸入は、過去1年の間、低調な推移が続いている。4～6月期の実質輸入は前期比0.3%と1～3月期の1.9%に続き、2四半期連続で増加したものの、昨年10～12月期に▲5.0%と落ち込んだ後の戻りとしては極めて明らかに弱い。また、4～6月期の水準は前年同期を2%程度下回ったままである。

中国向け実質輸出(2010/1=100)



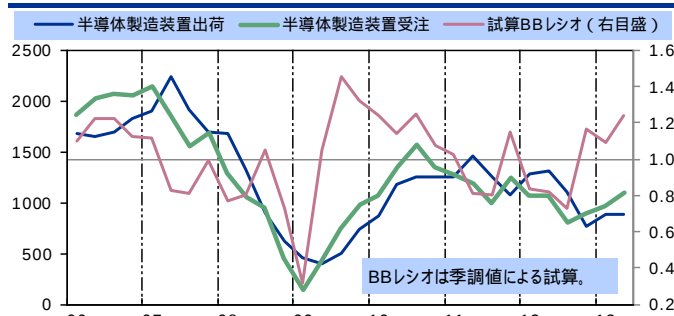
(出所)財務省、日本銀行

実質輸出：対NIEs（前期比、％）



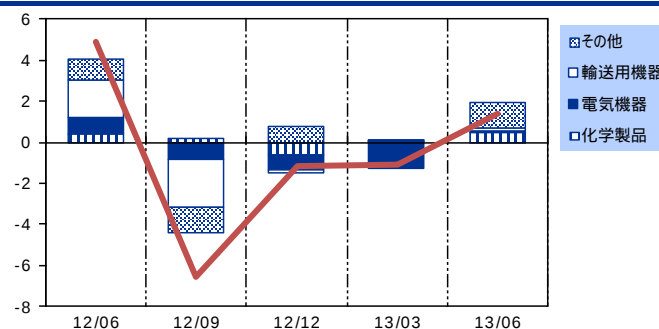
(出所)財務省、日本銀行

日本製半導体製造装置受注（季節調整値、年率、10億ドル、倍）



(出所)CEIC

実質輸出：対ASEAN（前期比、％）



(出所)財務省、日本銀行

落ち込みが目立つのは化学製品と鉱物性燃料

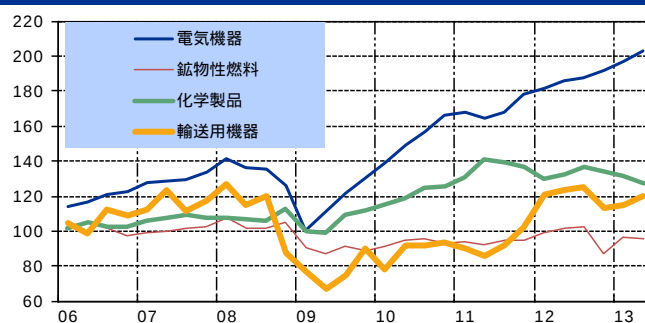
低迷の原因を探るために、品目別の動向を見ると、まず電気機器輸入の増勢に変調は見られない。スマートフォンの普及と日本製のシェア低下により通信機器の輸入が伸びている。次に、自動車が主体の輸送用機器は、円安により、日本メーカーによる海外生産車の輸入採算が悪化しているため、増勢こそ鈍っているが、大きく落ち込んでいる訳ではない。品目別に低迷が目立つのは、化学製品と鉱物性燃料である。このうち化学製品については、国内生産は回復しているため、円安により輸入品の競争力が低下（国内生産の競争力が向上）している影響が大きいと考えられる。判断が難しいのは鉱物性燃料だが、原発再稼働が進んでいる訳ではないため、現在の鉱物性燃料の低水準の輸入量は一時的な動きである可能性が高いと判断される。

消費税率引き上げ前の駆け込み需要で増加へ

今後については、消費税率引き上げ前の駆け込み需要

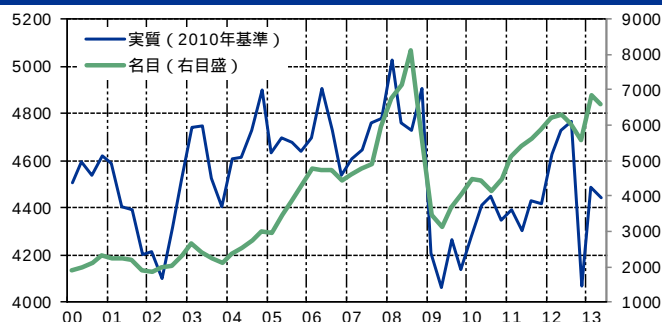
を受けて、消費財や生産財の輸入が増加する見込みである。そのため、2013 年後半の輸入は増勢を強めると考えられる。但し、2014 年 1～3 月期には個人消費より一四半期早く反動減に転じる可能性が高い。

実質輸入の推移（2005年平均=100）



(出所)財務省、日本銀行

鉱物性燃料輸入の推移（10億円）



(出所)財務省、日本銀行